愛鳥教育

1982 3月

第6号

愛鳥教育研究会

提　言　野鳥保護教育を重視した教科書改定と採択をしよう

会長
田村活三

私は義務教育の現場に40年あって、すでに職を退いて10余年になります。長い間自然指向特に野鳥保護教育を及ばずながら致してきましたが、今強く思うことは、ただ「野鳥を可愛がりましょう—大切にしましょう—巣箱を架けましょう」ではもはや全国の学校がついてきてくれません。しかしもちろんこれもやりますが、私はもっと根源に溯って大きな運動をしなければ追いつけないと思います。

(1)国の（文部省の）教育方針・指導要領・教科課程等を公害や自然指向・鳥獣保護等を欧米並にするよう働きかける。

(2)教科書編纂に鳥獣保護教材を多く採用するよう働きかける。

文教当局へ絶えず意見具申をするとか、教科書編纂委員の人選によっても異ってくるし、決まった人に働きかける必要もあろう、この編纂委員に教材を提供する必要もあろう。委員は自ら眼を高い視野に置いて、広い方角から絶えず最良の教材を研究し得る人でなければならない。

ここで例を国語教科書にとってみよう。

およそ野鳥教育において赤子である青少年に心に強く感動させる手段は、あらゆる教科で質や量のちがったさせ方があるとして、何と言っても国語が一番重要であろう。1～2の例を挙げると、中西先生のものの中でも雀の話、黒田長久先生の「むくどりの生活」こういう文を教科書で習うと一生忘れません。世の文筆家はこう言う名文や名詩を沢山書いて世に発表し、文学界に貯えておく必要があるのです。

次に教科書会社そのものにも以上のことを公正に平時研鑽してゆくべきものであると思います。

第　6　号　目　次

提言　野鳥保護教育を重視した教科書改訂と採択をしよう……会長　田村活三(1)
「みどりの学習」……計根別中学校　三浦二郎(2)
愛鳥クラブの活動……志津川愛鳥会(3)
野鳥日誌を続けて……千本小学校　片岡一郎(4)
野鳥観察いろはカルタ…男衾小学校町田たか子(5)
愛鳥活動に思う……下田澄子(6)
愛鳥の像……青梅第４小学校　獅子田浩(7)
学校でバードカービング講習会を……(7)
船橋小学校　石橋寿春
モデル校の一つとして……(8)
赤堤小学校　早崎　迅
１年間の実行……(9)
高部屋小学校　飯田美枝子
野鳥と友だちになろう……(10)
御前崎小学校　大石　斎
文化祭で展示発表……(10)
青陵中学校　皿井　信
葦毛湿原保護活動をふり返って……(12)
豊岡中学校　鈴木　清
愛鳥活動　この一年……(13)
マキノ南小学校野鳥クラブ
巣箱の観察を指導して……(14)
鹿野中学校　細谷賢明
ＰＴＡ活動にまで広がりを……(15)
豊洋小学校　郷司信義
受賞校から……(17)
報告　野鳥観察舎で研修……(20)
連絡先が変更……(20)

✡　✡　✡

• 第16回鳥獣保護実績発表大会記録
神奈川県　秦野市立本町小学校……⑤
東京都　五日市町立戸倉小学校……⑧
愛知県　豊橋市立豊岡中学校……⑩
北海道　倶知安町立比羅夫小学校……⑫
山口県　下松市立江の浦小学校……⑭
群馬県　太田市立鳥之郷小学校……⑯
山形県　酒田市立飛島中学校……⑱
広島県　東城町立帝釈小学校……⑳
鳥取県　鹿野町立鹿野中学校……㉒
大分県　玖珠町立北山田中学校……㉔

もう一つあらゆる教科で、あらゆる方向から進めるのは当然であり、たとへば、先に上げた国語、道徳、理科、図工、社会、音楽、特活、体育どの面でも取り上げられる。

(3)教科書採択について鳥獣保護教材の最多最良のものを選ぶこと。

各教科についても多出頻度調査をする必要がありましょう。

私は現職中から、しようとして出来なかったり、その土地により、校内の人的組織により、また年により出来ないことがあります。それともう1つ初等義務教育は単純に1つのことばかりに突込んでいられません。試みに1校内で研究と称してグループに分けて進めてゆくものに、9教科研究はもちろんのこと、図書館、交通安全、給食教育、安全教育、衛生教育、視聴覚教育と研究グループやその方向を挙げればきりのないほど多い、この中から野鳥保護教育研究を選び出すことは気の弱い校長では、とても出来ません。それですから国の方針として世論として、教科課程の中に入れてあれば、都会の児も山の中の児も一様にともかく教科書で習うのです。

毎年11月に行う全国鳥獣保護実績大会には昨年も会員校6校発表致してくれました。どこもほんとに立派でした。出席校の皆様ご苦労様でしたが、あの発表のどの校、どの部分でも皆全国の各学校の模範です。ぜひともあれを取り上げて配るとよい教材になります。連盟か本会でも啓蒙する必要を感じました。

私は今の教科書展示のこと一切どうなっているかわかりませんが、幸い老齢で手が空いています。さっそく今日から在所の教科書センターで各教科別、会社別掲出頻度調査をいたします。どうぞ全国の会員の現職の先生方、どの教科書が良いか調べようではございませんか、そして発表し合い、連絡し合いましょう。

みどりの学習

北海道中標津町計根別中学校　三浦二郎

本年度から、中学校も新しい指導要領に基く教育課程が編成され実践されております。この新教育課程の中で、いわゆる〝ゆとりの時間〟という学校裁量の時間がとれることになりました。私の学校でもいろいろ工夫しましたが、週に1教時分のコマが確保されることになりました。この1コマの時間を「計根中タイム」と称することにし、自主学習や教育相談にも使う幅の広い考え方で利用することにしましたが、特に校長である私には「みどりの学習」という自然教育の機会として使わせてもらえることにしました。

「みどりの学習」というよび方は、あらゆる生物活動（ヒトも含めて）の基盤には緑の植物があり、それを虫や鳥やけものも、そして人間も利用している、人間の側からいえばすべての人間の生活、生産活動は、緑の植物があって成立するのだから、その〝みどり〟をもっとよく知ろうという発想なのです。

しかし表面的にはそうであっても、私の真意は、今の生徒達の自然ばなれ傾向を憂慮しており、少しでも自然に目を向けさせたいというところにあるのです。酪農家の子でありながら、土のこと、肥料のこと、牧草のこと、まして牛のことに関する知識も経験もきわめて少なく薄いものになってしまいました。乳しぼり、飼料くばり、糞出しなどの労働は、スイッチ一つで処理されますので、中学生の出る幕はなくなってしまいました。

そういう酪農地帯の学校の背景の中で「みどりの学習」を開始したのです。授業の実際は、夏期間は「計根中タイム」の2週分の2コマを続き時間にして野外学習を計画しました。昨年の道東地方の春から夏にかけては、異常低温と冷雨続きであまりパッとした天候には恵まれませんでしたが次のような学習が組織できました。

5月、3年、雪どけ増水のケネカ、シベツ川合流点（ヤマベ稚魚の観察）
　2年　カワセミのすむケネカ川川下り
　1年　町界当幌川までのバードウォッチング（フィールド学習のマナー）
6月　3年　足もとの火山灰を読もう
　2年　土よう日早おき探鳥会コースでの自然観察
　1年　計根別チャシコツで先人の生活を考える（地域の先史）
9月　3年　秋の自然をさぐって　ケネカ川河畔歩き
　2年　千島火山帯の山なみを描く

1年　雪印乳業計根別工場跡でのバイカモの花（地域の歴史）

各学年3回ずつのフィールド学習をしたことになります。その中でケネカ川の河畔歩きは2、3年でやらせましたが、河畔林のやぶの中、道を歩かせたのはかなりハードな体験なのですが、一人の事故者もありませんでした。こういう自然の中での学習を通して、かれらが日常的には体験することが少なくなった自然の美しさやすばらしさ、その反面のきびしさといった自然の摂理をなんらかの形で学びとってくれたと思います。

野鳥のことでいえば、指導時間帯がだいたい午後なので、それほど多くの出現種はありませんでしたが、20種以上の野鳥に目をとめさせたことになります。このポイントにはノゴマがいる、ノビタキがいる、ここにはシマアオジがいるといったことはその通りの鳥が出現しますが、渡り遅れのハギマシコがたった1羽、切通しののり面で何やらついばんでいるのをゆっくり観察できたことや、学習の終末段階で上空に出現したチゴハヤブサの勇姿に見とれるという偶発的な場面もあり、とにかくフィールドでは教材にかくことはありません。そのことは野草でも虫でも同じことです。

「みどりの学習」は私の気ままな形でやっておりますが、この実践記録はそのつどイラスト入り4ページもののプリントにして全職員に配布しております。先生方もいつかは自分で自然教育が実践できるようになることを期待してのことです。

冬期になってからは、1年はバードモビル、2年はバードカービング、3年は巣箱作りに取り組ませております。「みどりの学習」の素材はいくらでもありますので、来年度はまた視点をかえての計画を考えるつもりです。

教師と子どものための

根室自然誌（3）

計根別中学校「みどりの学習」の実践記録を含めた野外学習と自然環境を考えた248ページ。（ガリ版印刷）　1,500円（送料共）

＜申し込み先＞

〒088－26 北海道標津郡中標津町字計根別107-1

計根別中学校内　根室自然教育研究会

愛鳥クラブの活動

宮城県　志津川愛鳥会

56年は「観察手帖の記入と提出指導」「室内例会の削減と充実」「野外活動の実践」の3つを目標に探鳥会や勉強会を開きました。

◎年間行事回数58回

ふるさと探鳥会（伊豆沼2回、高田1回）計3回、町外探鳥会（小泉・林際）3回、はんごうすいさん2回、愛鳥林刈払いなど3回

室内例会38会

親交会勉強会10回、イヌワシ研究会6回、チェック・リスト研究会32回

また、反省会では、真面目賞や観察手帖賞（手帖を立派に記入した会員）といった賞を与え熱心な子供会員のはげみとしました。当日のプログラムを一例として一部あげてみました。

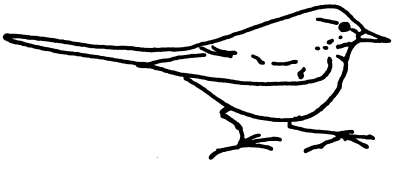
反省会のプログラム

1. 作文朗読　カワセミクラブ1人
2. オオハクチョウの説明　ハクチョウクラブ
3. 作文朗読　ヤマセミクラブ1人
4. 志津川のシンボルバード、イソヒヨドリの説明　イソヒヨドリクラブ3人
5. 渡りの説明　カワセミクラブ3人
6. 作文朗読　カワセミクラブ1人
7. キジバトの説明　キジバトクラブ

〜

12. 合唱「つばさを下さい」　ハクチョウクラブ
13. 志津川のカワセミの説明　カワセミクラブ2人
14. 作文朗読　カワセミクラブ1人
15. コハクチョウの説明　ハクチョウクラブ
16. カワセミ科の説明　ヤマセミクラブ2人

このほかにも、キセキレイクラブやキジバトクラブの発表がありました。



野鳥日誌を続けて

栃木県茂木町立千本小学校　片岡一郎

本校は栃木県の南東に位置する農山村で、児童数92名、しかも中学との併設校です。

昭和51年度から野鳥保護と緑化活動に力を入れてきました。次は昭和56年度に千本小で実施して来た愛鳥活動のあらましです。

1.　4月より毎日「**野鳥日記**」をつけている。

これは「学校の行き帰りに見かけた鳥の名と場所・鳴き声」を朝や帰りの話し合い時に発表してもらって記録している。

2.　5月から6月末にかけて実施したもの

(1)　**校内巣箱コンクール**　これには全校児童参加（低中学年は父兄の作品がほとんどです。）、その中から10点を金賞として選出し、県展へ出品。3年の堀江さんが銅賞となりました。

(2)　**校内愛鳥週間ポスターコンクール**　これにも全校児童が参加し、やはり10点を選んで県へ出品し、残りは地区内の掲示板や自分の家に持ち帰って目立つところに掲示しました。

(3)　**鳥のスケッチコンクール**　自分の好きな鳥を書いて提出させ、各教室の廊下に提示し、愛鳥への意欲と関心を高めました。

(4)　**鳥の鳴き声あてコンクール**　昼食時にレコードで鳴き声を流して当ててもらい、関心を高めました。

(5)　5月30日（土）東京の自然教育園で、本校の愛鳥活動について発表しました。

(6)　父兄に対し、「**愛鳥に関する実態調査**」この内容は、巣箱、給餌台、家のまわりで見かける鳥について記入し提出していただいた。

3.　**学校農園を利用して**「とうもろこし・さつまいも」を作り、これを乾燥させて保存し、冬期に学校へ来る鳥に与えています。

4.　**校内愛鳥標語**　俳句コンクール(10月・11月)特に俳句については郡の芸術祭にも出品しました。

5.　町内発明工夫展に**給餌台**を作って出品し入賞しました。（11月3日・4年の川又君）

6.　**その他**　年間を通して給餌台・巣箱かけと修理、学年毎の給餌活動、各家庭でいらなくなった穀類の持ちよりなどを続けております。（これは児童会が中心となって活動）

ここで、1にあげた野鳥日記で気づいたことをあげてみます。（5年生10名の観察－5月より12まで）

A．毎日ぐらいに見かけた鳥　カラス、スズメ、セキレイ、ハト、ヒヨドリ、ウグイス

B．よく見かける鳥　ツバメ、コジュケイ、ヒバリ、キジ、モズ、ウソ、トビ、メジロ

C．めずらしいと思った鳥キツツキ、フクロウ、ヤマドリ、ヒワ、ホトトギス、(ムササビ)

5年児童数は男7、女3、計10名です。毎日同じ道（主として山道）を往復しているので変化はありませんが、この活動を通じて愛鳥への関心が高まって来たことは確かです。

〔児童の日記〕から

5月1日（金）晴　18°　5年　大木　一

「遠足で見かけた鳥」　ぼくは、5、6年生で学校から片道8Kmある「国際カントリークラブ」へ行って来ました。途中には山・田・畑・森・林などがあり、そこで見かけた鳥の名まえと場所を調べてみました。　……中略

この中でも、キジは今年はじめて見ました。

注意すれば、いろいろな鳥がいるんだな、と思いました。カラス・スズメ・ウグイス・ツバメには何度も出あいました。

12月22日（火）晴　5年　荒井照代

毎朝、家の角に5匹ぐらいのコジュケイが飛んで来て遊んでいる。チョットコイと大きな声で鳴いている。辞典で調べてみたら、「キジの仲間で中国南部にすむ。日本では1919年に飼っていたものが逃げ出した。その後狩猟の目的で各地に放され、今ではそれが増加している」とのことがわかりました。

10月21日（水）くもり　5年　滝田　剛

学校帰りにぼくはいろいろな鳥を見かけるが、だいたいきまっている。でも、一番思い出に残っているのは9月中ごろの雨の日、道の両側が畑でその右にあった松の木の切り株から「キジ」の雄が出て来たことです。歩き出したので、そーっと後をつけていったら、林の中で見失ってしまいました。「さすがにかくれ方がうまいな」と思いました。12月になってから、その近くで尾羽を拾ったので、おじいちゃんに見せたら「きっと、やられたんじゃないかな。」と言ったので、かわいそうだな、と思いました。

野鳥観察 いろはカルタ

埼玉県寄居町立男衾小学校　町田たか子

1.　はじめに

鳥の名前を覚えることは愛鳥活動です。巣箱を作ることも愛鳥活動です。と子どもたちに自然保護や野鳥保護の思想を高めたいと自分なりに努力しました。けれども最もその推進力の弱さは教師の理解不足なのです。たくさんの鳥を覚えたい。探鳥会に出たい。本も読みたい……。そこで子どもに力をかりることを考えました。指導する力がないのだから子どもと共に学んでいこうと考えました。それがカルタの利用ということでした。

2.　カルタ作り

55年度1学期間を使い愛鳥クラブ、委員会の児童を中心にしてとりかかりました。「野鳥400号」からカルタの言葉をおかりしました。その言葉に図鑑から鳥の絵をひろい、絵ふだを作りました。プリントしたり、はぎったり、色をぬったりしながら、自然と鳥の名前やカルタの言葉がたくさん使われ、委員会やクラブ員の中では慣用句みたいになったり耳なれた言葉がかわされるようになりました。出来上がったものは4組ずつ各クラスに配布されました。

3.　名人戦

愛鳥委員会やクラブ他一部の者の活動からもっと輪を拡げた全校児童のもり上がりを考えたのでした。そこで各教室で全員の参加のためにまず学級名人戦、次に学年名人戦、最後に学校名人戦という形で行いました。なお、チャンスを2回与えようという配慮のもとに敗者復活戦まで考えました。名人には手造りの賞状とトロフィーを贈りました。1年目は紙粘土でカワセミを作りました。ジュースのあきかんの上にとりつけてニスをぬって仕上げました。思ったより立派なものができてみんなからうらやましがられました。

4.　カルタの影響

カルタの言葉や鳥の名前などに慣れるために昼休みの放送を利用して全校に流しました。野鳥観察カルタの解説ということで1日に5つくらいずつ言葉の説明をしたり、野鳥の生活や生態を話したり、時には私たちのまわりのようすと結びつけて話したりしました。

い　一番はじめはスズメとカラス

鳥の名前を覚える時は私達の身近にいるスズメやカラスをよく見ておくことが大切です。色、大きさ、とび方、鳴き方等。

スズメより大きくて、カラスより小さいというように観察する時の基準となります。

このようにして名人戦までに一通り解説しました。時には鳥の鳴き声をテープで流し、理解を深めたりしました。名人戦が近づいてくると廊下を歩きながら文句を口ずさむ子もいました。また友達同志盛んに言いあって覚えっこをしているような光景もありました。自分としても

ふ―― 冬のはしりはジョウビタキとあったから、この季節に見られるあの鳥はジョウビタキでいいのだな……とか、

ね―― ネクタイつけた紳士のシジュウカラだったから、あの黒いすじをつけている鳥はまちがいないな……とか、鳥を見る目が確かになり、自信がついてきました。

子ども達は「名人戦はいつですか。」とか「3年1組は絶対勝つよ！」など。職員室でも「うちのクラスはどうでしたか？」「あんなによくおぼえたのに選ばれなくてくやしいと○○さんは言ってましたよ。」と話題にのぼりました。どんな形にしろ関心が示されたことに対して非常にうれしく思ったのでした。

5.　今後の方向

課題として残されているものは調査や研究です。愛鳥モデル校として指定された学校の環境の調査をしていかなければ自然保護も本物にはならないと考えています。

愛鳥活動に思う

元五日市町立戸倉小学校長
下田澄子

冬の探鳥会という題で、A児（5年生）は、「手がぜんぜん動かない、耳はびりびりしてはちきれそう、骨のしんまでこおりそうな風が吹いている。……中略……みんなの吐く息が真白い、こんな所に探鳥会に来たのだ……冬の山の中はとてもさびしくてきびしい。鳥もほとんどいない。ぼく達は鳥をさがすために、寒さにじ

っと耐えていた。その時にだ、ガサガサと木がゆれた。む中で双眼鏡であたりを見た。木にとまっていたのは、ホオジロだ。その時は寒さを感じなかった。む中だったんだ。この時からだろう。ぼくがホオジロを好きになったのは。」

と書いている。

よく先生方の会合で「鳥はいいけれど、どうも名前がおぼえられないから」という話題に花が咲く。そしてまた、体験学習ということが多く言われる。この作文の終りの行は、何か答えを出してくれているような気がする。

愛鳥活動は、子どもと一緒にとにかく行動し体験することから始まり、共感するところにその実りがあるように思える。

3年生のB児は、「ヒヨドリ」という題で、「雨の中をヒヨドリが飛んで行く、木にとまって雨やどりをしているよ。下におりて、えさをさがしているみたい。この雨じゃあ、なにもないだろうに。私もいっしょにさがしてあげたくなった。さむいだろうな、もうやめればいいのに。でも、みつけている。きのうえさをとっておけばよかったのね。ブンチョウのえさでいいならあげるよ、おなかすいたろうな。」

と、日記の中でつづっている。

また2年生のC児は、「カワセミ」という作文に「……略……カワセミは、口ばしが長くて、おなかがオレンジ色で、とてもきれいでした。カワセミは、電線にとまって、池のさかなをねらっています。……私は、池のさかなをみると、カワセミがにくくなります。カワセミは、さかなをたべないでわたしたちがえさ台にあげる、パンやみかんをたべてもらいたいのです。……カワセミに来てもらいたいし、池のさかなも元気よくおよいでもらいたいから、やっぱり、わたしのあげるパンやみかんをたべてください。」

と書いてある。

3年生のD児は、1ケ月にわたって、たまたま2階から見える所に巣作りしたキセキレイの観察記録を書いたが、……前略

5月29日（火）晴れ、午前7時

2わの大きなひなが、巣から出て窓のしきいの所を歩いていた。もうすぐ飛ぶれんしゅうを始めるのかな。ガンバレガンバレ。

5月30日（水）晴れ、午前6時30分

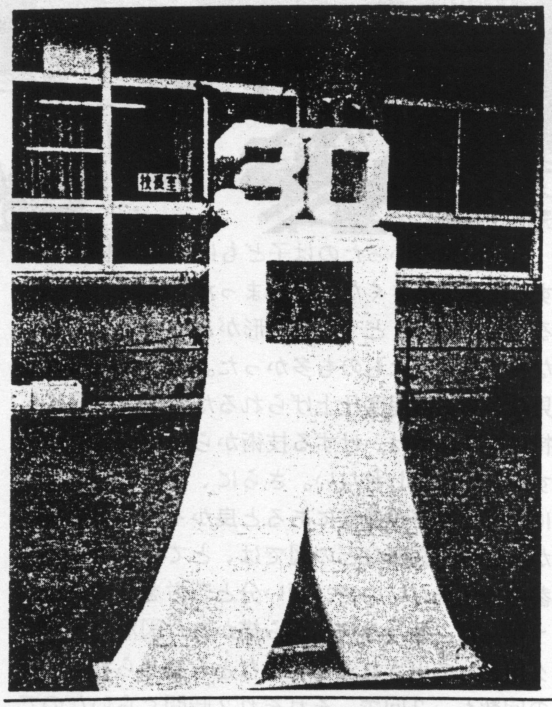
今朝、「チッチッチッ、チッ」とあまりさわがしいので見たら、親鳥が巣のそばでさかんに鳴いていた。私は、巣立つんだと思ってむねがドキドキした。親鳥は巣のそばでしばらく鳴いて、それから電線にとまって巣の方に向って鳴いた。その中2羽が巣から飛び出して親鳥と同じ電線にとまった。親鳥はまた巣のそばに行きさかんに鳴いた。まるで「早く出ておいで。」と言ってるようだった。でもあとの4羽はなかなか出てこないので、親鳥は初めの2羽をつれて川の方へ飛んで行った。2～3分するとまたもどってきて巣のそばで鳴いた。……後の2羽がとび出してきた。……のこりの2羽が出てこないので、2羽を川の方へつれて行った。親鳥が川の方に行ってる時弟が、「ゆう気を出してとんでみろ。」と大声を出した。するとびっくりして山の方へ2羽がとび出した。親鳥はもどってきて、2羽がいないのに気がついて、ひなをよんだ時と違った鳴き方をして屋根の上を見付けたり……さかんにさがしていた。私は親鳥に、「山の方へ行ったんだよ、山の方をさがしてごらんよ」と言ってみた。……学校に行っても早く親鳥とあって、他のひなの所へ行って家族で幸せになってほしいと思った。

とある。

学校が愛鳥活動を、教育目標「明るく思いやりのある子。」の実践場面として位置づけ、特活、道徳、理科を中心に努力を続けてきた。月日はすでに10年を越えている。子どもたちはいつのまにか季節と対応しながら、先輩の後を継ぐ形で、課題を追究したり、諸活動をきわめて自然に行い、作文、日記などにも、観察したことや、その理由づけや、感想など素直に綴るようになっている。また地域の人も、学校のそうした動きを暖かく見守り、関心をよせ、援助の手を常にさしのべている。

「豊かな人間性の育成」という言葉にふれるたびに、私はそんな戸倉に愛惜をもっている。

愛鳥の像



東京都青梅第４小学校　環境構成部

私たちの青梅四小は、開校当時より野鳥保護の心を育てたいと、愛鳥活動には全校的なとりくみをしてまいりました。そして、昭和42年２月10日、東京都より愛鳥モデル校の指定証をうけ、伝統を今日にうけついでいます。

本年度は、本校創立三十周年の記念すべき年を迎え、「自然を愛護し、やさしい心で動物や植物に親しむ態度を育てる」という目標のもとに、教育活動の中での愛鳥活動を展開しています。

幸いに、創立30周年記念事業実行委員会が組織され、記念事業の一つとして「愛鳥の像」を建立しました。本校に学ぶ14 02名の愛鳥のシンボルとして、いっそう野鳥を観察する目をのばし、野鳥を大事にする校風を高めたいものです。

この愛鳥の像は、本校の獅子田浩教諭が設計し、制作にあたりました。愛鳥の像と書いた文字板と数字の上の野鳥三匹は焼物でできています。今後、子どもたちに焼物でいろいろな野鳥を作らせてみたいと考えています。

バードカービング

学校で講習会を

世田谷区立船橋小学校　石橋寿春

「先生、私は今年でＰＴＡを卒業ですが、来年もこのような会をする時は、ぜひ、呼んでくださいね。」「苦労したけど、出来上がったシジュウカラを見て、よかったなと思う。」「作っていると、さて羽は？　くちばしは？　どんな顔をしていたっけ？　と悩んだけれど、そのたびに鳥や写真をよく見るようになった。」参加したお母さん方の感想を聞くと、バードカービングの楽しさがよくわかると思います。

昨年の５月、初めてカービングを見た私は、学校でも子どもや父母と一緒にやれないものかと考え、愛鳥委員会（校内の教員組織）や学校長に相談してみた。その結果、土曜日の午後なら出来る、展覧会にも出品しようということになった。

11月24日、31日の両土曜日の午後、図工室を借りることとして、プリントで参加を全校に呼びかけると、40名ほどの希望者が集まった（半分は児童で、大体４年生以上）。講師には連盟のはからいで、幸運にもカービングの第１人者内山春雄先生に来ていただけることになった。現在、連盟で扱っているキットには、船橋近辺で見られる鳥が少なかったが、スズメ、シジュウカラ、カワラヒワに使える木材があり、図面もそろっているということなので、それを主に使っていくこととした。参加者の費用は1,200円とし、その中から次のものを用意した。

○個人で用意したもの

木材（ジェルトン材）、オルファークラフトナイフＳ型、小ふで、サンドペーパー、

○全体で用意したもの

リキテックス（セットを２セット、カラーだけ10色ほど）、針金（２㎜、１巻）ジェッソ（下塗り剤１かん）、紙テープ（巾２㎜、２巻、足用）、つや出し剤（１びん）、木工用瞬間接着剤（２本）

第１日目　内山先生の説明を聞き、木材をけずり始める。木材は大まかな形なので、図面をもとに、電動糸のこで上面と側面を切り出す。材質は良いのだが、厚いのでなかなか切れず、糸のこの刃も何本か折れてしまう。ナイフでけずるにも根

気がいる。結局、その日は荒けずりのままで持ち帰り、次週までに形を整えてくることにする。

第2日目　彩色の予定だったが、すぐとりかかれた人はわずかで、ほとんどの人はけずり方がまだ足りなく、形の修正や、けずる仕上げを進めていった。講習会が終わり、やり残した分は、出品の予定もあるので、後日放課後に集まって仕上げていくことにした。

いく日か後、薄暗くなりかけた図工室で、いく人かのお母さん方、子供も達が色をぬっていた。針金で足を作り、切ってきた木の枝にとまらせると、出来ばえもさながら「ハーッ。」という声が上がる。手に包帯を巻いていても、出来たと喜こんで帰っていくお母さん方が多かった。

11月7日の展覧会に出品出来たのは23羽。それぞれ木にとまって並べられ、中にはカキの実のついた枝にとまっていたり、親子の鳥が仲よく並んでいるものもあった。展示されたコーナーでは顔を近づけて熱心に見る人や、質問をしてくる人も多く、大変好評だった。

出品出来なかったのは子どもに多く、中にはけずりすぎて小さくなってしまったものや、首のあるもの、また、どうしても形がとれず四角な胴になってしまったものも多かった。大人だと図面を見ながらある程度仕上げられるだろうが、子ども特に中学年には、けずる技術からいっても少しむずかしいかもしれない。さらに、けずっていく時に、写真などが豊富にあると良かったのではないかと思う。図鑑などの図では、とてもけずる際の参考に出来ないので、ずい分と苦労をしていたようだった。色々な角度から描かれた図がカービング用として出されるといいなとも感じられた。会の回数も、2回で、それぞれ2時間ぐらいなので、時間的にも少なかった。回数も多く、充分時間をかけて仕上げていくことが、1番良いと思う。

つい最近、父母から、出来上がったツバメのカービングが届いた。それは翼を広げ、飛んでいる素晴しく美しいツバメだった。正月から2カ月ほどかかってコツコツ作り上げたそうである。その間、親子でよく話が出来たと話していた。

モデル校の一つとして

世田谷区立赤堤小学校　早崎　迅

公立の小学校として特に何があると言うわけでもなく、ごく普通の存在ですが、昭和54年に愛鳥モデル校を受けることになったのは、今にして思えばそれなりの背景があったことを思わずにはいられません。

その一つは、現在の校庭の周囲に比較的大きな樹木が育っていることです。

おそらく創立当時、地域の人々が新しく建てられたこの学校に期待を寄せて個人的に持ち寄ったものも多くあったと思われます。

その中で、夏になって子どもたちや、野鳥たちに涼しい木陰を作ってくれるものに、10メートルを越すようなスズカケ、ユリノキ、イチョウ、などがあり、こんもり茂って野鳥たちにはよい憩いの場ともなっていたことです。二つめには、子どもたちの飼育栽培の活動が、はでではないけれどもある程度定着して長く続き、校庭の東側にある小鳥小屋からは、インコや文鳥のにぎやかな声が聞かれ、それにつられてか、それともこぼれた餌をついばみにくるためか、スズメ、キジバトを、意外に身近なところで目にしていたことがふだんの生活の中にあったことです。

昭和55年度の発足に当っては、野鳥の巣立ちを思わせるような不安と希望の入りまじった状態で、職員と子どもたち共々に一応の組織を組んで出発しましたが、実際には、先輩の学校の様子に学んでクラブ活動の子どもたちを中心にして、校庭や学校周辺で見られる野鳥を調べたり、前年度にかけた約五十個の巣箱の利用度を観察したり、

外部団体の探鳥会に有志だけで参加して知識の吸収に努めるなど、いわば土台作りに明け暮れた1年間だったと言えるでしょう。

全校児童の愛鳥の心を育てるためにどうしたらいいのかと言う素朴な悩みの解決策として、将を射んと欲せば先ず馬を射よ、のたとえに従い、都の鳥獣保護委員の原先生にご来校願って職員の研修会も実施してきました。その年ＰＴＡに呼びかけて実のなる木を寄贈してもらい全職員で場所を選んで植えたことも記録に残っています。

夕虹映ゆる ― このような1年間が過ぎ音もなく５６年度を迎えましたが、あわただしい新学期の４月が終わろうとした頃、「先生、松の木の巣箱にトリが入っているの知ってますか、シジュウカラらしいけど。」と、６年生の子の吉報第１号。

それまで忙しさにまぎれていた先生がたもそして新学期の変化に心をうばわれていた子どもたちもこの情報に接してから一斉に５月の野鳥に目が向けられたようでした。

松の木は校門のすぐわきにあったため、２週間後には巣箱に出入りする親どりの姿や、えさを待つヒナのかわいい声を数多くの子どもたちがいつくしみをもって見守っていました。その頃バードウィークにちなんで全校児童が愛鳥の絵にとり組んだ時もシジュウカラ親子のことが、きっと心のどこかに住んでいたことでしょう。

一年間の実行

神奈川県伊勢原市立高部屋小学校
飯田美技子

登校時には、カワラヒワが出迎え、全校朝会をしているとセキレイがとびかう本校も、愛鳥モデル校に指定されて以来、児童、教師ともに野鳥に対する関心が高まってきた、というのが実態である。目下のところ、愛鳥教育を学校研究として進めているが、わずかな期間でもそれなりの成果はあがっているようだ。職員の研究の中心に推進委員会を設け、各学年の児童の自然に関する意識を調べたり研究の方向を探るなどをしてきた。

教師の自然界に対する関心の深さが、児童の活動に与える影響も大きいと考えられるので、春と秋の２回、観察会（職員向け）を、実施した。その際、鳥だけに限らず、植物に詳しい校長の説明があったり、アリジゴクを見たりの勉強もできた。

以下は56年度の主な活動である。

○愛鳥ポスターの募集、展示
○今月の鳥の紹介（各月毎）
○学級の鳥の選定
○夏休み自由研究（野鳥の生態など多かった）
○夏休み課題・巣箱づくり（５年生）・設置
○探鳥会（児童・教師）
○渡り鳥の学習
○給餌台づくり（設置）
○冬期用の餌のよびかけ
○「きょう見た鳥」の調査（ロード・センサス）
○愛鳥映画会（豪雪スズメ軍団）
○学校の鳥の選定（投票―セグロセキレイ）
○各学年児童によるＴ・Ｖ研究発表（ゆとりの時間）
※その他　愛鳥委員会、野鳥クラブの活動等。

以上のような活動を通して、身近な野鳥に対する興味は強くなり、児童、教師ともに、スズメをよく見ようという態度もできてきた。見知らぬ鳥を見つけても、スズメぐらいの大きさで嘴が黄色くて、などという会話がきこえてくるようになった。

以下は、野鳥クラブ一年間活動をした４年生の作文である。

鳥のこと　　安西隆子

わたしは、クラブの時間が好きです。これからまた、５年、６年と、はいるつもりです。

鳥のことは、まだ、カラスのことと、スズメやツバメのことしか知りません。

高部屋小学校で見られる鳥は、ツグミとキジと、カシラダカとセグロセキレイとムクドリとスズメぐらいで、学校によくくる鳥はセグロセキレイです。そのセグロセキレイは投票をして、学校の鳥ときまりました。またクラスの鳥をきめたりしました。４年２組の鳥は、ムクドリです。どうしてムクドリにしたかというと、この近くにもいるし、一年中いるからです。はじめは、キジとか、ハクセキレイとか出されて、その中のスズメがいいと思いました。でも、そのうち、だれかが、スズメは、このちかくにもたくさんいるからもうだれか、友だちになっているかもしれないといったのに、気がつきました。わたしはそうかもしれないと思ったので、ムクドリにかえました。それで多数決をして、ムクドリときまりました。いろいろとムクドリのことをしらべました。わたしは、こんなに鳥がいろいろいると、はじめてしりました。

野鳥と友達になろう

静岡県小笠郡御前崎小学校　大石　斎

子どもたちに県鳥「サンコウチョウ」をスライドで見せたら「こんなきれいな鳥がいるの、すごいな。近くにいるの」と思わず口から声が出た。そうだ。いま、子どもたちに自然を見つめる目や、人間と動物（野鳥）との共存生活の大切さを見わける力を育てないと、自然のドラマに気づかない大人になってしまうのではないかと考えた。まず、わがクラスから、野鳥と友だちになろうの輪を広げるために、「ゆとりの時間」を利用して試みたことを述べます。

①　季節ごよみづくり　「○○を探そう」

野鳥だけでなく、植物・魚・昆虫など四季を追って自然のよさ、しくみ、ふしぎさなどを一人でも多くの子どもに興味・関心を持たせることが、野鳥と友だちへとつながっていくベースになるのではないかと考え、こよみづくりをはじめた。活発であったり、そうでなかったり、こんな状態であったが続きました。（小学校では多様化のほうが継続性があるようだ。）

②　ポスターづくり(愛鳥週間、動物愛護)

図鑑を見たり、ききにきたりして、概念的なものから夢のあるものなど、幅の広い野鳥（動物）へのあたたかさの感じられる作品が多かった。(子どもたちには夢があり、やさしさがあるのだな。)

③　観察学習（ツバメ・落鳥など）

ツバメ・落鳥・傷鳥したものの解説などをときどき取り入れた。

子どもの中から、ツバメの観察日記が出てきたときはうれしかった。

④　傷鳥保護（スズメ、メジロ、ノビタキ、セグロカモメなど）

夏休み中に、左羽根をいためたセグロカモメの幼鳥が6年生の子どもによって持ちこまれ、子どもたちが毎日、先生セグロカモメ元気。何を食べるの、エサを持ってくるよの声にはげまされ、手をつくしたがだめでした。

そんなことも知らない子どもが、わざわざつりをして取った「サワラ」を持ってきて、だめだったと言えず困ったが、はっきり言ったら、かわいそうにお墓を作ろうのことばで救われました。

また、保護していた野鳥が元気になって、放鳥したときの子どもたちの顔や歓声を消したくないものです。

以上のように、子どもたちが野鳥と友だちになりやすい窓口を作ってやりました。まだまだ、いろいろの構想を持っていますが、子どもたちの実態、地域の様子などを考慮に入れないと長続きはしないと考え、子どもたちの反応を認める努力をしています。

このごろでは、先生／野鳥クラブを作るか、作って、はいるからの声が教室の中に聞かれます。

子どもたちの願いを学校全体に広げようと思います。

文化祭で展示

愛知県豊橋市立青陵中学校　皿井　信

新しい学校に転任し、白紙の所へ新しくどう愛鳥活動を進めるかが、私のこの1年の課題でした。4月、野鳥クラブ（正規の授業内の活動）と野鳥部（課外活動）を結成し、その生徒を核として愛鳥活動を進めることです。クラブの方は幸い78名の希望者がありましたが、教室や指導者の関係で44名にしぼりました。野鳥部の方は、授業後を主とした授業時間外で活動する運動部と同じものですが、希望者を募り入部させました。部員は1年15名（男8名、女7名）2年14名（男6名、女8名）3年3名（男）の計32名のメンバーです。

「野鳥ジグソーパズル」のコーナー

「野鳥を庭に呼び寄せよう」のコーナー

今回は、このクラブ、部の1年間の活動ではなく、文化祭にどう展示、発表したかを中心に紹介します。11月中旬の1日が文化祭です。それまでのクラブや部の時間に発表展示物を作りました。1人でも多く野鳥に関心を持つ生徒を増やすために「野鳥と友だちになろう」を展示発表テーマとしました。堅苦しいものでなく、遊びを通して楽しく学び、関心を高めてもらおうという事に工夫をしました。展示を見るだけでなく（特に文字はなかなか読んでくれないので極力少なくした）見学者が参加する、作業する中で野鳥への関心を高めてもらおうと心がけました。発表、展示内容を記してみます。（部）＝野鳥部作成、（C）＝野鳥クラブが作成

(1)「野鳥と友だちになろう」にふさわしい各種パンフレットの配布（「愛鳥キャンペーン新聞広告縮刷版」を参考に作成・部）

「野鳥と友だちになろう」「探鳥のすすめ」「冬休み野鳥を庭に呼び寄せよう」「ヒトの心の中にトリの保護区を」

(2) 野鳥クイズ（部）

① 野鳥クイズⅠ「〝野鳥と友だちになろう〟あなたは身近かな鳥をいくつ知っていますか」（絵と説明を見て解答用紙に記入させる）

② 野鳥クイズⅡ「〝身近かな野鳥クイズ10種――鳥の特徴をおぼえよう――〟双眼鏡でのぞいてみたらこんな鳥の姿が見えました。1～10までの鳥の名前を下の解答用紙に記入して箱の中へ」

(3) ポスター展示

① 野鳥との出会いのために（部）

② トリの生命を護ることはヒト自身を護ること

③ 「食べ物」でつながる自然界の生きものたち

④ トリは環境をはかるものさし

（②③④はサントリー愛鳥キャンペーンから）

(4) 野鳥ジグソーパズル

① サントリー愛鳥キャンペーン「生きものの世界は助けあい」

② オリジナル野鳥ジグソーパズル3種（部）

絵本;藪内正幸著「日本の野鳥」1～6を2冊ずつ買って野鳥学習カードを作った時に出た表紙から作ったもの（部）

a「スズメ」（かおや、はねの模様、くちばしの形などを覚えましょう）

b「コゲラとアカゲラ」

c「カラの仲間」（ヤマガラ、コガラ、ヒガラがいます。どれだかわかりますか）

(5) 野鳥の見わけ方パネル（部）

① カラの仲間の見わけ方

② ツバメの見わけ方

③ カモの見わけ方（陸ガモと海ガモ）

④ サギの見わけ方

(6) スライド上映「校区の野鳥」

身近かに見られる野鳥34種を50枚解説づきで30分に1回上映（上映時間15分）

(7) 野鳥を庭に呼び寄せよう（部）

① 「野鳥を呼び寄せよう」のパネル

② 鳥が好む実のなる木紹介パネル

③ 「どんな鳥がどんな餌を好むか」のパネル

④ 野鳥の好む餌実物15種展示（どんな鳥がどんな餌を好むか）

⑤ 野鳥のための餌台の展示（12個）

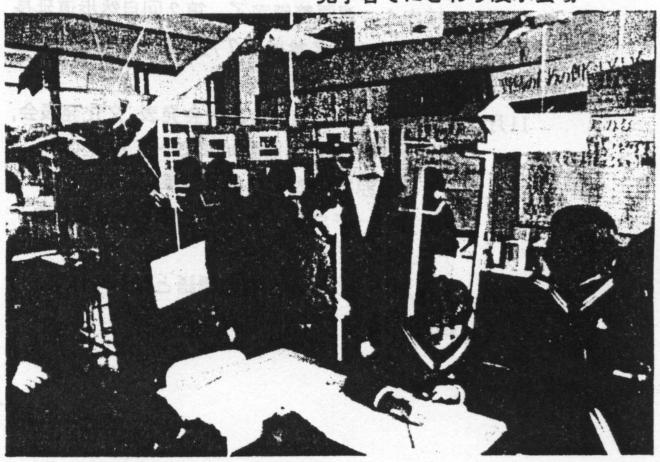
(8) 巣箱を利用する鳥（部）

「どんな鳥がどんな巣箱を利用するか」

鳥の写真と巣箱を展示（カラ用、ムクドリ用、キビタキ用、セキレイ用計20個）

(9) 野鳥のぞきメガネ「身近な野鳥を覚えよう」

見学者でにぎわう展示会場



―― 色、模様、形などの特徴を覚えておきましょう」（部）

ベニヤの箱をつくり、一ばん下に30Wの蛍光燈を入れ、その上にベニヤをおき四角に穴をあけスライドケースを取りつけスライドを入れる。その上に直径３㎝の穴をあけたベニヤを取り付け、その上に虫メガネを固定した。更にその上に虫メガネを固定した。更にその上に直径１㎝の穴をあけたベニヤのふたをし、その穴からのぞく。１台で５種、２台つくり計10種の野鳥。スライドをさし変えると何回でも使用できる。

(10) 野鳥ぬりえコーナー（C）

連盟のぬりえを画用紙にコピーしたものと、クラブ員が作ったオリジナルあわせて20種。

(11) その他

① 野鳥の絵本コーナー「楽しい絵本で野鳥を知ろう」―― 野鳥の絵本27冊展示

② 野鳥のペン画作品（C）

③ 野鳥の絵と説明44種―― 野鳥紙芝居（C）

④ バードカービング10種（部）

⑤ バードモビール８種（部）

⑥ 野鳥の折り紙12種（C）

⑦ バードクッション６種（部）

※④⑤⑦は市販のものを作製

「ジグソーパズル」「ぬりえ」「のぞきメガネ」に人気が集中しました。

葦毛湿原 保護活動をふり返って

愛知県豊橋市立豊岡中学校

この１年間の活動は数々の多難な道であった。１つ１つが実践というものであるだけに、立案作成しては計画実践というくり返しの連続であり、クラブ員もめまぐるしい行動力であった。年間計画の作成は暗しょうにのりあげることもあり、突発行事があったりでとてもやりがいのある１年だった。実践活動内容を一部記載すると、

4月 ●湿原クラブ結成，年間計画の作成，葦毛学習会65名参加

5月 ●第１回自然歩道整備30名参加，530運動湿原実践活動，バードウィークポスター募集

6月 ●第２回自然歩道整備50名参加，葦毛湿原ビデオ撮り

7月 ●湿原ベンチ、テーブルペンキぬり，案内板整備

8月 ●鳥獣保護実績発表県大会（県知事賞）

9月 ●取財活動報告，葦毛湿原地型模型１ｍ×１ｍ製作。

10月 ●校内ミニ湿原整備完了，第２回自然歩道延長新設作業に30名参加（７月の第１回作業は60名参加）

11月 ●鳥獣保護実績発表全国大会発表、文化発表会，葦毛湿原野鳥給餌活動始まる～４月まで。

12月 ●葦毛湿原案内板とりかえ作業。

1月 ●新春バードウォッチング，葦毛湿原資料コーナー完成

2月 ●巣箱コンクール，湿原標語とりかえ作業，予餞会準備

3月 ●巣箱架設作業，お別れ奉仕活動，次年度年間計画

これらの活動の中には野鳥病院に入院した野鳥もおり、アオバズク、コサギ、スズメ、ヒヨドリなどが元気になって自然にもどりました。

常時活動としては、校内葦毛、野鳥コーナーの毎月とりかえ、葦毛案内板内容毎月とりかえ、毎週土曜日午後２時から葦毛パトロールと野鳥への給餌活動、葦毛の詩校内新聞毎月発行、湿原パンフレット作成、校内ミニ湿原整備など、本年の湿原クラブ行事を遂行してきた。なかでも案内板のとりかえ作業は、９年間湿原で雨水にさらされた湿原名物の案内板であったが老朽化し危険な状態になってきたため新規に２ケ月を要して、高さ３ｍ幅0.9ｍの大きなものを作り仕上がりも上々であった。

校内へのアピール活動、校外への活動等、湿原クラブは自然のすばらしさ、生きることのすばらしさを多くの人々に知っていただくために、動物と植物のかかわりを紹介し、葦毛を愛する人を一人でも多くと延べ350名のパトロール隊員を送り出し、ボランティアの活動となっているのです。

コナラの木々に飛来する野鳥は、チッチッチッとさえずり、私たちを迎えにきてくれるやさしさに励まされ、「湿原のゴミ集め、大変ですね、ごくろうさま。」見も知らぬハイカーやピクニックの皆様の心あたたまる言葉が、胸にジーンとやけつき、この活動は決してくじけまい、負けまいと初心に呼びもどされたものでした。

無理のない活動を……息長く続けることの大変さは身をもって味わい、苦境の時はうわごとのよ

うに、なさけない言葉が浮かんでは消えるのでした。しかし私たちは多くの仲間がいる。今眼をとじて振り返ってみると本当に良かったと思う。この活動は地味ではあるが、大切な意味をもっているのだと哀心から思っています。

パトロール隊員の一人は

「葦毛パトロールで葦毛湿原へ行くと、意外とゴミが多いのに気が付きます。菓子を食べ、その包み紙を捨てていくのです。その包み紙が木や草に引っかかっているのを見ると木々や野鳥がめいわくし、とてもあわれにも思います。なぜ、そのようなことをするのでしょうか。自然を汚すということは、自分たちの心をも汚すことだと思います。また、パトロールしてみて良かったことは友達がいっぱいできたことです。教室の中の友達と違って、皆んな明るくニコニコしているのです。ここでの楽しい出来事は、大人になってもきっと忘れられない思い出になるでしょう。」　（パトロール日誌より）

これからも明るい生徒の笑い声がこだまする湿原で、郷土にある自然の宝を守りぬき、次の世代に、正しくプレゼントできるよう、より一層努力し、ボランティアの小さな活動の波紋が、大きく広がることに期待して、本年の活動事業のしめくくりとしたい。

〝住む人の　心が育てる　この自然〟

野鳥のペン画

愛鳥活動この一年

滋賀県マキノ町立マキノ南小学校
野鳥クラブ

わが校の年間愛鳥活動を概観しますと年初は1.5m以上の積雪の中で、浜辺に出て水鳥の観察をし、学校では作製したばかりの餌台に5・6年生が場所を分配して給餌、雪で餌をなくした野鳥を招きます。雪どけから6月にかけては繁殖期、巣箱をかけて観察するのに余念がありません。同時に生態研究として野鳥観察や観察地区の給餌木の研究、餌になる昆虫の研究をします。9月末から10月にかけて、浜では、それまで1羽もいなかったカモ類が北の国から次々渡来して来ます。これらも種類によって渡来時期が少しずつ違います。水鳥班の活躍場面はこの時から年末まで続くのです。年度の終りを飾るのは卒業製作で6年生は自分たちの愛鳥活動をふりかえって後に残そうとします。一年を通して大きな活動と言えば以上のようなものです。

1）　水鳥の観察

9月末から4月中旬までの7ケ月間、北国から渡来して琵琶湖を彩る水鳥の群は、子供たちの心を育てる琵琶湖の風物詩です。野鳥班では校区にやってくる水鳥の種類や生息場所、定住期間の調査をしています。近くの浜には昨年コハクチョウが15羽来ましたが、今年は幼鳥も連れて23羽が11月中旬よりずっとすみついており、白鳥の楽園として目下給食の残パンなどの給餌に懸命に努力しています。

2）　巣箱づくりと巣箱がけ

本校の巣箱作りは10年余の歴史があり、学校裏の林に野鳥が多いのも、この長い間の先輩の活動に負う所が大きいと言えます。毎年1月中旬に巣箱を作り、コンクールをした後、2月末には林に取付けます。観察用巣箱は約40個で、野鳥を驚か

さないよう気をつけながら営巣のようすを観察しています。最近３ケ年の若鳥の巣立ちを見ますと、巣立つのはほとんどヤマガラ・シジュウカラで、Ｓ54年は32羽、Ｓ55年は70羽、Ｓ56年は68羽とかなりの数の若鳥が巣立っていき、子供たちの希望の星となっています。そしてこれらの若鳥たちが健やかに成長してくれる事を心から願い、観察活動を続けているのです。

3）　観察活動・探鳥会

野鳥の観察は週１度程度、定まったコースを観察して回り、四季出現する野鳥の種類、場所、数等を記録していきます。この地を訪れる鳥は林のようす、気象の違いを敏感に捉えてか、年々少しずつ種類が変化していきます。

しかし裏の林は地主があり、最近シイタケ原木として伐採され、林の様相が大きく変化したので、明年の野鳥出現の変化が心配です。また、野鳥班は機会あるごとに県野鳥の会の大人の人と行動をともにし、県下の探鳥会に参加し、専門家の指導を受けて観察能力を高める事により、学校での観察を充実させ、愛鳥の心を一層豊かにしています。

4）　野鳥の餌しらべ

野鳥の餌は春から夏にかけて昆虫を多くとり、秋から冬には昆虫の量が減り、木の実を多く取るだろう、と言う想定のもとに、１学期は林に生息する昆虫の調査をしてみました。シイタケ林にある朽ちた原木には一番多く昆虫が観察されました。主なものはシロアリ、サシ虫、ヤスデ、ミミズ、コガネ虫等です。秋も深まると、林のあちこちの木の実が色づき、食欲をそそる色合いになります。どの実にどんな野鳥が来るかは今後の問題ですが、10月以後高学年でゆとりの時間を利用して、林の中の木の実、学校周辺の食餌木の調査をしました。学校周辺ではネズミモチ、イボタ、ナンテン、柿等が野鳥の役に立っていることがわかります。

１月の巣箱・えさ台づくりコンクール

5）　その他の活動

雪国の当校では、現在建物の外は厳しい自然との戦いがあり、野鳥は吹雪を避けて校舎内にたびたび入って来ます。給食の残りのパンやチーズ、バター、果物を餌台に入れてやる事が野鳥の命を救っていると言う実感をひしひしと感じる今日この頃です。その他の愛鳥ＰＲ活動については紙面の都合で省略します。

6）　日頃の悩み

愛鳥活動推進上の悩みは種々ありますが、①過密な教育課程の中で、愛鳥活動をどう位置づけ、効果的な活動を盛り上げるかという点です。②多忙な日常生活をしている子供たちに対し、心をゆり動かし、自然に発する自分たちの活動として主体的に取り組ませるために、という点です。③教師も子供もそれぞれのめあてを持って日常学習を進めている中にあって、愛鳥教育が「他のものを愛する優しい心」「弱い者に味方するけなげな心」等心情を育てる重要な徳育活動である事を教師全員が共通理解を深め、より強力な活動を推進していける体制をつくる点等であります。

まだまだ多くの課題を抱えてはいますが、本年は上記３点の何れか１点でも改善策を立てたいと思います。

巣箱の観察を指導して

鳥取県鹿野町立鹿野中学校　細谷賢明

1.　はじめに

学校における愛鳥活動の具体例として、最も多いものの一つに巣箱かけがある。最近、この巣箱かけに対する批判的な意見もあるが、その地域の生態系に及ぼす影響等と、児童生徒に与える野鳥愛護の精神高揚の面を比較したとき、現状では、私は後者の価値を評価したいと思う。

本校でも、かなり以前から部活動やクラブ活動の一環として、巣箱かけを実践してきたが、架設後の観察なり指導がとかくなおざりにされがちであった。そこで、巣箱かけをする以上、その利用状況を観察し、成果を今後の巣箱かけのあり方の資料にしていこうと考え、野鳥クラブの手によって５６年度から研究を進めることにした。

2. 研究方法

(1) 巣箱の形状：初年度でもあり、同じ型に統一してシジュウカラ用片屋根型のものを30個架設した。

(2) かけた場所：町内のお寺や神社と中学周辺の5ケ所を選定した。その主な理由は、多くは山ずそであり、かつ境内であれば、卵やひなを盗んだりいたずらをする人も少なくないだろうと考えた。

(3) かけた間隔等：境内の林縁と林内とを配慮し、かつ2回目の営巣を考慮して、やや近すぎるが巣箱の間隔は50m前後を基準にした。なお、地上からの高さはおよそ2.5m、出入口の向きは定めず、広い空間のある方に向けた。

3. 研究の経過

研究項目としては、巣作りから巣立ちまでにわたって、詳しく観察を続けさせたが、ここでは紙面の都合上、巣作りから産卵までの時期的な点についてのみ述べたい。

(1) 巣箱をかけた期日：準備や授業等の関係で予定より遅くなり、かつ場所によって異なり、3/11から3/29の間に巣箱をかけてまわった。

(2) 巣箱を利用した数と鳥の種類：30個の巣箱をかけたうち、シジュウカラが7個、ヤマガラが7個利用した。

(3) 利用した鳥の初卵日

〔表1〕2種の鳥の初卵日（月／日）

鳥名	初卵日
シジュウカラ	4/5 4/10 4/14 4/14 4/16 6/5
ヤマガラ	4/1 4/9 4/29 5/6 5/11 5/31※

利用した14個のうち、推定を含めて6例ずつの初卵日をあげると〔表1〕の通り。（他の2例は推定不可能）

この表から、当地でのこれら二種の初卵日は、シジュウカラは4月上旬から4月中旬の2週間ほどに集中し、ヤマガラは4月上旬から5月中旬の6週間ほどに分散しがちであることがわかった。（※印の巣は、時期が離れており、産卵数も少ないことから、2回目の営巣とも推測される。）

文献によると、初卵日はその土地の3月後半から4月前半の気温が影響するといわれるので、調べた結果、平年との差が＋0.4度なので、ほぼ平年に近いといえよう。

(4) 巣箱の架設から初卵日までの間隔

前述のように架設時期が遅れたので、架設から何日ぐらいで初卵を産むだろうかと調べた。その結果、前述12例のうち最も短い期間で初卵を産んだのは、シジュウカラでは18日目、ヤマガラでは14日目であった。（これに近い例が他に3例）

ヤマガラに比べてシジュウカラが数日遅れる理由は、ヤマガラの初卵は、コケによる巣作りが完了しないまでに産み始めるのに対し、シジュウカラは、コケの基礎工事を終り、次に産座に毛類を敷いてから初卵を産む傾向があるため、数日遅れるものと考えられる。

4. まとめ

(1) 当地では、巣箱を利用するカラ類は、多くの場合4／1から5／10ごろの間に産卵を始め、それ以後の産卵はごくわずかで、2回目の営巣のものと考えられる。

(2) 巣箱をかけてから、カラ類が初卵を産むまでには、少なくとも2～3週間はかかる。

(3) この(1)・(2)の結果から、カラ類の利用を目的にした巣箱をかける時期は、できるだけ3月15日ごろまでに架設するのが、利用率を高めることになる。

(4) よく愛鳥週間の行事として、5／10ごろ巣箱かけをする例を見聞するが、こんな時期では(1)・(2)の結果から、カラ類はほとんど利用してくれないとあきらめておく方がよい。

以上、野鳥クラブを指導して観察した成果の一部を述べたが、積雪もある当地では、冬期に架設して、野鳥がねぐらにも利用するようにしてやりたいと考えている。

PTA活動にまで広がりを

大分県杵築市立豊洋小学校　郷司信義

本校では、昨年に引き続き「ゆとりの時間」を使って愛鳥教育の実践を行なってきた。その中で、ささやかではあるが、PTA活動の中でも愛鳥教育が実践されたことは、今年の大きな成果だと思

っている。以下、簡単に今年の歩みをふりかえってみることにする。

1　親子巣箱作り（ＰＴＡ活動）

本校は、一昨年度より「親と子の豊かなふれ合いを育てるＰＴＡ活動」をテーマに県指定のＰＴＡ研究を行なってきた。その中の一分野である学級活動で４年生が「親子巣箱作り」に取り組んだ。その時のようすと感想を一母親は次の様に記録している。

親子巣箱作りの記録

私たち４学年は、どのような活動を通して親子のふれ合いを深めようと何度となく話し合いましたが、なかなか話がまとまらずにいました。ところが、二年前より５月の愛鳥週間に合わせて高学年が班ごとに巣箱の共同製作をし、校舎の周辺にかけているとの話を聞き、私達四年も親子でこの巣箱作りに取り組んだらということになり、愛鳥週間中の５月13日に実施致しました。

体育館で資料を参考にしながらそれぞれ好みの巣箱の設計をし、なれない手つきで親が指導しながら子どもを中心に製作に取り組みました。

材料は一括購入しましたが、道具は各自持参致しました。実際、ノコの使い方、くぎの打ち方等でとても苦労しました。ノコが切れずに、だんだん口の方がゆがんでしまい、どの顔もほほを紅くそめ、真剣に取り組んでいました。なかなか釘が真直ぐに入らず箱の中に出てしまうんです。また、少しの透き間があっても、へびや虫がはいるとわるいといって、何度もやり直す子どもの姿に小鳥への思いやりの心を見、とても嬉しく思いました。

１０時から始めて２時間ほどでなんとか出来上がりました。中には、商品のように立派に出来た方もいました。また、余った板切れを持ち帰り、家でも作ろうと意欲を燃やすお母さんもいました。

午後は、校舎の周りや亀山公園へ巣箱をかけに行きました。男の子などは、木にはしごをかける時など、本気で頼れる部分もあり、たのもしく思いました。こうして、高い所や低い所、めいめいが思い思いにかけました。

この巣箱作りを通して「必ずこの巣箱に小鳥が入り、新しい雛が誕生する。」とおっしゃった先生の言葉を信じ、「時々巣箱を見に来ようね。」と、子どもと約束した

自分の子どもの誕生を待つかのような、本当に心温る、すがすがしい一日だった。また、やっと出来たという成就感もたっぷり味わった。

2　愛鳥週間の取り組み

(1)　学級活動

１年　ぬり絵　ポスター

２年　ぬり絵　ポスター　作文　ぬり絵の鳥について調べる。

３年　ぬり絵　ポスター　自分の好きな鳥のスケッチと特徴調べ

４年　巣箱作りの作文　ポスター

５年　ポスター　作文　野鳥ペンダント作り　巣箱作り

６年　巣箱の利用調査　巣箱作り

(2)　愛鳥祭り　５月１６日

上記各学年の学級活動で製作、調査、研究したことを全校で発表し合った。

最後に、昨年と同様に全校10班の縦割り班で100個の巣箱を学校の周辺の樹木にかけた。

(3)　映画鑑賞会

日本野鳥の会より借りた映画「奇鳥オオミズナギドリ」を全校で、「さすらいのシラサギ」を高学年だけで鑑賞した。

3　日常活動

(1)　探鳥会

学校の周りの巣箱の観察をかねた学級ごとの探鳥会、学校前の奈多八幡宮の松にやってきたアオバズクの観察、大分県野鳥友の会主催の探鳥会への希望参加、守江湾の冬鳥の観察などを行なってきた。

(2)　奈多地域で見られる野鳥調べ

登下校で観察された野鳥の名前を毎日、朝の会で発表し、記録してきた。これを３月に月別に見られる鳥としてまとめる予定。

(3)　学習会

日本鳥類保護連盟発行の「野鳥保護のしおり」を使っての学習会を高学年は学期２回の割で行なった。

4　おわりに

今年も野鳥に関するできごとがたくさんあった。その主なものは、カワラヒワやスズメのひなを拾ってきたり、スズメ、ジョウビタキ、ツグミの落鳥を拾ってきたり、キジバトの巣をいくつも見つけみんなで観察に出かけたり、大小さまざまの巣を拾って来たりした。このことは、子ども達の目が徐々に野鳥に向いてきたものだと喜んでいる。

受賞校から…

次は、いずれも今回の実績発表大会において発表された各学校の苦心した点や出来事などです。先生・生徒の立場からと、いろいろですが後ろのページの大会記録と合わせて読むとより一層、参考になると思います。なお、お読みになってのご意見などがありましたら、お知らせ下さい。

「情熱に支えられて」

北海道倶知安町立比羅夫小学校　赤塚洋昭

本校は41年の『愛鳥モデル校』の指定以来愛鳥活動を続け、今回林野庁長官賞を受けることができ、全校児童・職員心から喜んでいる。

本校は全校児童21名というへき地小規模校であるが自然環境に恵まれ愛鳥活動には適している。しかし、小人数なるがゆえの苦労も多い。たとえば野鳥に関する活動はかなりの種類と量があり、それを少ない人数でこなさなければならず、時間確保が難しいということである。5年前から課外活動時に「野鳥活動の日」を設けて観察、学習会等各種の活動をしているが、現在はいわゆる「ゆとりの時間」を当てている。しかし、毎日する記録的な仕事も多く、子どもたちは、時には遊び時間をけずってやることもある。

また、教員の異動による問題もある。野鳥に詳しい教員が赴任するとは限らないということである。本校には現在5人の職員がいるがいずれも野鳥のことは全く知らなかった者ばかりである。しかし、子どもたちの愛鳥への熱情と伝統を守り発展させるという使命感みたいなものに動かされ、子どもたちからおそわり、さらに自ら学んで高まり児童の指導に当たっているのである。

16年間愛鳥活動を続けてこれたのは本校の愛鳥活動が単なる趣味やクラブ的な活動ではなく、全児童職員の熱情に支えられ、教育活動そのものとして確かに定着しているからであろうし、父母地域住民、その他関係機関の協力、支援があったからであろう。

「離島の愛鳥活動」

山形県酒田市立飛島中学校　斎藤敏一

飛島は山形県唯一の離島で、戸数180、人口930名、年間所得の95％を漁業収入に頼る典型的な漁村であります。昭和25年に酒田市に合併され、昭和30年に離島振興法の適用を受けるに及び、急速に開発された。また、昭和38年には国定公園に指定され、観光地化も進んでおります。

こういう地域にある本校は、過疎の波及により、小学校77名、中学校は34名の小規模併設校です。

本校が愛鳥モデル校の指定を受けたのは、昭和53年度から昭和56年度までの4年間でした。

島全体が「鳥獣保護区」の指定も受けてはいるが、鳥に関しては全く無関心で、鳥に石を投げつけたり、「ウミネコ」を捕らえてぶら下げたりしている情景はあちこちに見られました。

こういう環境下において、「指定校としての活動はどうあればよいのか。」私たちの課題だったわけです。そこで、「全島学園化」をモットーとし、(1)教科・その他の活動と、(2)グループ活動（全員参加）の二本立てとし、特に、ＰＲ活動に主力を注ぎ、観察・実態調査・巣箱活動と、職員・生徒一体となり、精力的に活動を展開してきました。

そのために島民一般の意識は高まり、「鳥獣保護区」との関連もあって、過去にあったような情景はほとんど見ることがなくなりました。

なお、生徒の自主性を損なわないための継続活動の進め方などを検討し、今後に対処していくつもりです。

「あっ！先生、実験の豆が!!」

群馬県太田市立鳥之郷小学校　江原政夫

5月初めのある日、5時間めのことであった。5年生が発芽実験のため、準備をして芽が出るのを楽しみにしていたいんげん豆を、鳩が1粒も残さず食べてしまった。おかげで実験はやりなおしである。児童たちは、「鳩ちゃん！私たちの実験を応援してね。」と言いながら、実験をやりなおしたのである。

また、6年生のクラスでのことである。授業に熱が入ってきた先生の声が一段と大きくなった時、ひとりの児童が、「先生!!シィ――!!」と、口に十文字に指をあててみせたのである。見ると、窓際のロッカーの上を、2羽の鳩が散歩でもするように歩いている。教師は小声になり、児童たちも急にすまし顔になって、静かな授業が続けられたのである。

本校では、教室やベランダによく小鳥たちがやって来て巣を作り、ひなを育てる。児童たちは、こんなとき、水やエサをやって、ひな育てを助けてやっている。この間は、生まれた鳩が寒さのた

めか2羽ともに死んでしまった。児童たちは、涙を流しながら、担任教師とお墓を作ってやった。

また、どんぐり集めの最中には、ベランダに集められたどんぐりの上に、セキレイがやって来た。たぶん、どんぐりの中の小虫を食べに来たのであろう。

鳥舎で飼育している鳥たちの世話はたいへんで時には、当番のため家庭行事も変更しなければならないこともある。当然のこととはいえ、生き物の世話では、1日の休みも許されない。しかし、苦しい鳥の世話の中から、愛鳥精神、そして自然保護の気持ちが、さらに、豊かな人間性がはぐくまれていくのである。

「地域父母の援助を受けて」

東京都五日市町立戸倉小学校　梅本登

昭和55年度より、愛鳥活動を「ゆとりの時間」の中に位置づけ、全校で教育課程内で実施するようにした。その結果、問題点として大きく二つのことが考えられ、現在、年間計画の改善などを通して取り組んでいるところである。

その一つは、野鳥という素材をどのように取り上げ、活動化させるかという教材化の問題である。

1年から6年までの発達段階の異なる子ども達に、どのような活動を与え、どの程度の到達内容を考えるかが明らかにされなければ、授業として位置づけるには不十分であると考えている。

次に問題となることは、指導者の問題である。担任が授業で、直接、子どもとともに活動することになると、担任の野鳥に対する関心、知識の量などにより、指導に差が生じたり、深まりが少なかったりする結果になる。この点は、どの教科でも同様である。一つの解決策として、常に情報提供ができるような組織と、資料の拡充整備を図っていきたいと考えている。

上記二点が、大きな問題であるが、授業で行うと言っても、子どもの活動は、常に継続されなければならず、意欲を持続させるという面でも工夫の必要がある。

愛鳥教育は、地域の特色を生かし易い活動であるが、これらを常に情報交換し合っていくことが発展のために欠かせないものと思う。

終わりに、本校の愛鳥活動は、愛鳥モデル校指定以来現在も、地域父母の有形無形の援助を得て進められていることを付記し、お知らせする次第です。

「何も知らなくて……の活動」

愛知県豊橋市立豊岡中学校　鈴木　清

私達の活動は生徒主体の活動でなければならないことに苦労した。

それにしても部員約40名は、校内・校外活動においてよく積極的に実践したものだと思う。校区内にある葦毛湿原の保護、保全パトロールは毎週土曜日、午後2時からゴミ収拾のために活動するが、この活動が週しめくくりであったとも言える。多くのエピソードはこの自然の中での活動中に生じた。例えば、空缶、ビニール袋拾いのために湿原の雑木林の中をかけめぐると棘のあるサルトリイバラ、イヌザンショウ、ノイバラ等の植物につかまって出られなくなったり、また、ある時は雑木林の中で散らされた紙を汚物バサミで集めているとそれは大便のぬぐい紙であったりして思わず叫んでみたり、あるいは、全員山の中で一目散に逃げたあの足長蜂急しゅうの事件など等数えあげればきりがない。

私達は野鳥に対して、ヒヨドリさえもはっきりした姿を頭の中に描けませんでした。本当に野鳥に対してなじめなかったのです。

カラスも〝カラス〟で事足りると思っていたら、ハシブト、ハシボソと区別されました。どうしたら姿と名前が結びつくか苦労したのもこの頃です。

写真や絵を描いたり、録音をとりにいったりして必死に名前を覚えました。本にある野鳥の一羽でも実際に自然の中で確認したり、発見したりした時の感動は今も忘れられません。「生き物って素晴らしいなー」と心の中に深く刻みこまれました。

これからも、ごく普通の本当にあたり前のことを、コツコツと観察したりして楽しんでいきたいと思います。

「愛鳥活動を指導して」

鳥取県鹿野町立鹿野中学校　細谷賢明

本年度も30個の巣箱をかけ、特に4月から7月の間、巣箱を利用したカラ類の営巣状況を中心に観察させました。その成果を、県科学研究発表会に発表させることを一つの目標にしたので、時には、巣箱のふたを開いて中をのぞいたりして詳しく観察する必要も生じました。しかし巣箱かけの優先する目的は野鳥愛護であり、観察研究のために巣箱に接近することが、野鳥にとって営巣生活を妨げ、あるいは外敵を誘う要因にもなるおそ

れがあるというジレンマに苦しみました。

この点について、〝巣箱の中をのぞかなくてもできるような観察研究が多くある〟という指摘を読んだこともありますので、今後その方向に指導していきたいと考えます。

つぎに傷病鳥の看護についてですが、小はスズメのひなから大はクマタカまで、いろいろな種類の野鳥がいろいろな弱り方で届けられ、素人の私達には、その処置にとまどうことばかりです。府県によっては、これら傷病鳥獣の保護センターが設置されているところもありますので、そのような設置の拡充を要望すると共に、特に応急的な処置や看護飼育上の留意点についての研修会や、図書の刊行を望みたいものです。

最近の理科教育の世界的動向の一つとして、科学的ヒューマニズムが重視され、自然を調べる探究活動は、人間性形成の重要な活動であると見なされています。野鳥愛護の活動を通して、調和のとれた豊かな人間性の育成をめざして、指導を続けたいと思います。

「高い次元の愛鳥活動を求めて」

広島県東城町立帝釈小学校　天野文雄

本校の愛鳥活動は18年も前にはじまった。私が4年前に赴任した当時の愛鳥活動は、春にトウモロコシやヒマワリの種を配り、秋にその実を集めて品評会をし、十二月下旬に裏のカラマツ林に、冬餌つりをする、単なる年中行事を踏襲しているに過ぎなかった。

前からやっている行事だから、引き継いでやるという意味しかなかった。これは私だけでなく、全職員がそのような意識でやっていた。

本校は20数年も前から理科教育に力を入れてきた。理科教育の目標の到達点として、自然を愛護する態度を育てることをあげている。自然を愛護することの一環として、愛鳥活動を本校教育の中にすえることは当然のことであろう。

このような立場で、野鳥を観察すること、よく知ることによって、生まれる愛鳥活動にしたいと考えた。愛鳥活動の計画でもこれを重点とした。

鳥類学会員の原田先生に月1回の勉強会をもってもらうようにした。探鳥会など、子どもの関心は高まったが、鳥の声を聞き鳥を確認することはなかなかむずかしい。でも大人よりはわかりの早い子もおり、小さな鳥博士もできるほど、興味と熱意、意欲をもつ子どももできた。

遅々とした歩みであるが、野鳥をよく知ることで愛鳥活動をする子どもが育ちはじめた。野鳥がさえずり舞う町づくりへの期待がふくらむ。

「笠戸島の自然を守って」

山口県下松市立江の浦小学校

私たちの町は、山口県の南東にあたり、徳山市を中心にひろがる周南工業地帯にあり、市の南に浮ぶ笠戸島の中央部に、江の浦小学校があります。

この笠戸島は瀬戸内海国立公園内にあり、島の約半分が国有林で秩序ある開発によって、自然破壊から守られ、市民の自然との対話をはかる場とするために、「笠戸島自然休養林」として指定されており、この公園と国有林にとりかこまれています。

こうした恵まれた自然環境を生かし、その環境に積極的に働きかけ、自然を守り、美しい郷土を築きこの大切な自然を永く子孫に伝えるべき努力をしております。

活動の失敗例を2～3挙げてみると、

- 巣箱をいろいろ工夫しながら毎年かけているがなかなかはいってくれません。昨年は2～3個はいった跡が見受けられたが、巣立って行く姿を見た児童はいませんが、児童たちにはとてもよい励みになりました。
- 冬の給餌活動も、今年は暖冬で木の実や虫などがおり、例年なら今頃（2月）は盛んに給餌台に来ていたのですが
- また白浜海水浴場や付近の海岸の清掃や公園・道路等の空缶拾い等行っていますが人々の心がけの不足に何とも言いようがありません。

海岸はナイロン製品のごみの山でこまっております。海岸で育つ野鳥たちも困っているようです。

「ぼくらの野鳥クラブ」

大分県玖珠町立北山田中学校　安部大二郎

ぼくは、去年の4月から、野鳥クラブに入りました。野鳥クラブに入部した動機というのは、ぼくの家のまわりが山に囲まれていて、野鳥の声があちこち聞かれるため、あの鳴き声は何という鳥が鳴いているのかなあ、と関心を持ったためです。

まず鳥をおぼえるために、鳴き声とその鳥のスライドを見て鳥の名前や習性を学びました。それから近くの山で鳥の鳴き声をおぼえたり、姿を観察したり、野鳥保護についての話し合いなどをして、クラブの時間が楽しみになりました。

そして、去年の夏休みには、野鳥キャンプをし

ました。その時の事です。冬のうちにかけておいた巣箱が、だれかに石でもぶっつけられたのか、くずれて、地面におちていました。ぼくらは、くやしさでいっぱいでしたが新しい巣箱にかけかえたり、古い巣箱の中のそうじをしたりしました。

ぼくが一番残念に思ったことは、こわされた巣箱の中に、ちゃんと巣材が入っており、鳥が利用してくれていたのを知った時でした。そこでぼくは考えました。ぼくも野鳥クラブに入部していなかったら、あるいは、巣箱をこわす側の人間だったかも知れません。

野鳥を保護する事が、豊かな地球の未来を作ることに役立つのであれば、一人でも多くの友達に、保護の大切さをわかってもらわなくてはなりません。

今年は新学期から、校長先生が入院されて、指導の先生のいないクラブになりました。それでも部員は、18人にふえ、上級生としてのぼくの責任は重くなりました。まず下級生を、近くの山に引卒して、鳥の名前・習性などをおしえたり、12月ごろには巣箱かけをするとかの年間計画をたてたりして、校長先生の帰りをまちました。7月からは、校長先生も元気になられたので、野鳥クラブの活動が活気にみちて、はりきっています。今年の夏休みの課題としては、保護の大切さを全校生徒に呼びかけることにしました。

まずスイカやヒマワリの種子とりなどで冬季の餌集めをお願いして、野鳥保護の関心を高めていく計画です。このような保護活動は、これから次々と下級生が引きついでいってくれるでしょう。

野鳥保護の輪が、たてによこに大きく広がっていく事を願っています。

報告　野鳥観察舎で研修

冬期研修会を昭和57年1月31日(日)に千葉県の行徳野鳥観察舎でカモの観察を中心に行ないました。参加された方は先生17名、その他の会員9名でした。会場として観察舎の視聴覚室をお借りして話し合いを、2～3階の展望室でスズガモ数千羽ほか、カモメ類、サギ類などをじっくりと見ることができました。

尚、観察舎は、望遠鏡も数多く備えつけられていますので、児童・生徒の勉強の場としても利用できます。

連絡先　千葉県行徳野鳥観察舎　TEL 0473-97-9046

●静岡から参加された先生から、

先日（31日）の研修会に参加し、少しばかり、愛鳥教育のあり方がわかりかけてきました。

それは、勘能者がいなくなるとのぼくの発言に対して、だれでもできるものを作ることだの答えには、ドキッとしました。わたしのやっているものは、ひとりよがりのものだったのかと反省させられました。

さあ、Today Birds Tomorrow Men のために、会員を増し、充実した会にしましょう。

（会員・大石　斎）

※連絡先の変更※

愛鳥教育研究会の事務所は（財）日本鳥類保護連盟内に置いてありますが、3月8日から連盟が右記の住所に移転するのに伴って、会の連絡先も変更になります。

尚、郵便振替番号は変わりません。4月から、新年度になりますので57年度会費をお願い致します。学校などで書類が必要な場合は御連絡下さい。

年会費　2000円

※会員の皆様から寄せられた活動の報告と実績発表大会の記録を合わせて6号ができました。この号がお手元に届くのは、学校では新学期の始まるころでしょう。新年度の計画に役立つヒントもたくさんあると思います。詳しいことをお知りになりたい方はご紹介いたします。

愛鳥教育　第6号

1982年3月31日
愛鳥教育研究会 発行

〒150 渋谷区宇田川町37－10
渋谷レジデンシャルオフィス405
(財)日本鳥類保護連盟内
TEL（03）465－8601
振替　東京2－92041